私の研究

タイ・マレーシア・インドネシア

高木保興

一九七〇年代は、多くの開発途上国にとって、インフレと累積債務とに悩まされた十年間であった。一～二品目の一次産品の生産や輸出に政府収入や外貨の主要部分を依存するモノカルチャ経済には、石油危機とその後の世界経済の停迷が財政や貿易の赤字幅を深刻にするのに十分強力であったからである。ところが、例外もあった。タイ、マレーシア、インドネシアもその少数グループの一員である。

インドネシアは輸出の七割、政府収入の五割を一品目に依存するという典型的なモノカルチャ経済であるが、その一次産品が石油であるところに特徴がある。二度にわたる原油価格の急騰は外貨を豊かにし政府収入を飛躍的に拡大させた。財源が豊かになるにつれて開発五カ年計画の目標は高くなり、政府主導の性格が濃くなっていった。一九七〇年代の年平均成長率八%はこのような背景の中で達成された。

順調そうに見えるこの国の問題点は、国際競争力を持ちうるような製造業の成長が現段階でさえ期待できないことである。原油の生産・輸出は国内経済との連結が弱い。涸渇してしまえば元の状態に戻ってしまう。石油が無くなっても高い成長率を維持できるような工業化された経済を造り出すことが究極の目標であるが、今のところ、原油価格の上昇傾向がモノカルチャ経済の性格を益々強固なものにしているだけである。一九八〇年代になって石油の供給が過剰になり始め、八三年にバーレル当り五ドルの切下げに追い込まれると、上昇を前提として建てられていた開発五カ年計画は、外貨事情の逼迫と財政赤字をもたらすことなしには、遂行が不可能になってきた。為替レート切下げ、税制改革、金利自由化等一連の政策は、一九八〇年代になって開発戦略を変更せざるをえなくなってきた政府当局の苦境を物語っている。

マレーシアもまた産油国ではあるが、モノカルチャ経済ではない。石油の比重は輸出総額の三割弱、政府収入の二割に留まっている。もちろん、原油価格の高騰は電力・水道、運輸・通信等のインフラ整備を可能にし、それが年平均八%という高成長率を達成させた主な要因であることには違いない。

華僑や印僑に経済を牛耳られていたという点では一九六九年頃のマレーシアはビルマとよく似ていた。しかし、採用された所得再分配政策に大きな相違があった。ビルマ政府は国有化政策によって中国人やインド人を国外に追い出して、パイをビルマ人だけで分配しようとした。ところが、経済が麻痺してパイそのものが縮小してしまい、ビルマ人の生活は返って長期にわたり向上しなくなってしまった。これに対してマレーシアでは、経済成長の加速化を主目標に置き、年々の増加分をブミ（マラヤ人）に優先的に配分するというブミプトラ政策

を採用した結果、所得再分配という目標は一気に達成できないものの、経済成長が著しく、一九八三年には一人当り所得一九八五USドルにまで達した。

この国の特徴は輸出入の対国内総生産比がそれぞれ五〇%に近いことである。これだけ世界経済と密接に結びついていると、世界経済の変化が国内経済に与える影響は大きくならざるをえない。一九八〇年代になっての原油価格の切下げと他の一次産品や工業製品の輸出の伸び悩みは、国内経済を好況から不況へと転換させた。政府は世界経済の停迷を短期と予想して景気拡張政策を実施した。ところが、予想に反して世界景気は好転せず、このままこの政策を継続すれば貿易収支の赤字や財政赤字は益々深刻化すると判断し、引締政策に転じた。開発戦略の転換を余儀無くされたわけである。

タイは米、キャッサバ、ゴム、砂糖等に代表される農業国家である。十分な税収や外貨を確保できる産業や地下資源がこれと言って存在しないから、政府主導の経済開発をするには財源不足である。また、過去に一度も植民地にされた経験がないので王室の影響力は強く、独裁者が出現する余地はきわめて小さい。経済発展の過程で政府の果たす役割は、望ましい方向に民間の企業活動を向けるためのインセンティブを与えることである。これが、タイの工業化を緩やかなものにしている主な要因であろう。

非産油国タイが年平均七%という成長率を一九七〇年に達成できたのはどうしてであろうか。主要輸出品目である米やゴムといった一次産品の価格が、第一次石油危機頃に急上昇したことが外貨不足を深刻なものにしなかったと考えられる。一九七八年の第二次石油危機の時には、新たな一次産品ブームが起こらなかったから貿易収支の赤字は大幅に拡大した。輸出の約三割を占めるようになってきた工業製品も世界需要の停迷を反映して徐々に伸び悩み、一九八〇年代になって石油危機の影響はタイにとって深刻なものになった。

シャム湾で見つかった天然ガスを利用して重化学工業化を図ろうとする東部臨海工業開発計画は石油危機下のタイにとっては願ってもない千載一遇のチャンスであった。ところが、財源に余裕がないから外国からの借入や国債の発行によってインフラを整備する以外に方法がない。民間企業を誘致するために、国内では民間資金を吸収し、外国に対しては債務を累積しなければならないという苦しい状況に立たされることになった。為替レート切下げ、税制改革等の構造調整が開発計画の主目標に設定されたのはこのような事情による。

世界経済の停迷という新たな状況下での成長・発展のための戦略を模索しているのが現状であろう。政府主導の行き詰まりから民間企業活動の活発化を目ざしているインドネシア、ブミプトラ政策の悪影響が出始め社会安定と経済成長という目標の両立が困難になってきたマレーシア、政府主導が不可能なことを悟り東部臨海工業開発計画の実施を遅らせているタイ、いづれの国も一九八〇年代の成長は低くなるであろう。

（大学経済学部教授）

私の研究

戦争文学 *The Dynasts* を読む

風間末起子

トマス・ハーディ（Thomas Hardy, 1840-1928）は、幅広い読者層を持つ小説家であるが、実のところ、彼の念願であった意欲作は、叙事詩劇『覇王たち』（*The Dynasts, An Epic-Drama*, 1903-4, 1906, 1908）であった。

『覇王たち』は、実際、ハーディ文学の集大成であり、彼の他の文学的業績を陵駕する一大巨篇である。作品は、ロシアと全欧土に展開したナポレオン戦史という十年間の史実を、想像力の世界である文学に融合させたものである。作品に見られる芸術的技巧と成熟した思想、構想的規模の巨大さは、トルストイの『戦争と平和』に匹敵すると言われる。この大作の創作に際し、ハーディは、作品完成までに数十年の温存期間を費やし、彼が史実の入手と選択整理に払った多大な労力には並々ならぬものがあった。

作品に扱われている十年間は、大まかに言えば、一八〇五年五月にナポレオンがイタリア王に即位する時期から、同年十月の英軍と仏軍のトラファルガー岬沖の一大海戦に端を発して、一八〇八年から始まるペニンシュラ半島戦役、一八一二年六月の仏軍のロシア遠征を経過して、一八一五年のワーテルロー諸戦によるナポレオン敗退までである。ハーディは、こうした多彩な戦争史実をどのような技法と仕立てによって、香気と迫力に満ちた文芸作品に構築したのか。

『覇王たち』は、古語や廃語や造語の羅列によるぎこちなさという用語上の欠点を指摘されながらも、それを補って余りあるいくつかの秀逸点を持っている。まず第一に、天上界の精霊たち（Phantom Intelligences）の創造が挙げられる。精霊には、歳月の精、哀れみの精、皮肉の精、不吉の精、風説の精、記録の精などがあり、彼らは、天空から、うごめく人間劇を鑑賞する。精霊は、作者の思想と感情の伝達手段であり、彼らは、言わば、ハーディの「多面的な精神機能」の具現化である。特に、歳月の精と哀れみの精の二つの精は、ハーディの中に同居する理性と感性を別々に人格化したもので、精霊の中の主柱となっている。

歳月の精は、思想的には決定論者であり、常に沈着冷厳な哲人で、地上で苦闘する人間の姿にも一片の同情心すらかけない。彼には、読者と精霊にむかって、宇宙を支配する「内在意志」を透視して見せる権能が与えられている。この内在意志の透視画的手法は、説得力ある具体的な描写法として興味深い。内在意志は、人間界を操縦する引綱のような働きをし、その解体図が、X光線的透明化によって、より鮮明に描写される。歴史は人間が作っているのではなく、内在意志が司る宇宙機構の一つにすぎず、人間の行為はすべて自動人形化されているという思想が、六回にわたる内在意志の透視画によって明らかにされる。

さて、冷徹に透視画を提供する歳月の精に反して、虫けらのように死に絶えていく人間に、常々、同情の叫びを寄せ、歳月の精の意見に異を立てるのは、哀れみの精である。歳月の精と哀れみの精の相反する二者の対立拮抗は、劇的緊張感の拠り所となっている。本来、精霊は、主として、形而上界を表現するためとか、作者の感慨を表明するために創案されたのではあるが、たび重なる精霊間の相克は、登場人物間の心理的葛藤に似ていて、劇的効果を大いに高めている。

二つ目に挙げられるべきものは、ト書の独創性である。とりわけ、ト書の中で試みられている高空からの鳥瞰図は、目の覚めるような映像を読者に提供し、ト書の持つ芸術的迫力を見せつける。天上での精霊たちの哲学的議論ののちに、巻頭早々に突然現れるヨーロッパ全土の鳥瞰図に、読者は息を呑むことだろう。また、作品の後半部におけるフランス軍のロシア退却のパノラマ的描写は、作品中、最も印象に残る場面の一つである。ト書の鳥瞰的視点は、雪原の中を退却していくフランス兵士たちの姿を卑小な「芋虫」として捕え、さらに、雪に埋もれて死んでいく彼らを無生物の「白い吹き出物」として描写する。退却軍の天空描写に駆使された二つの比喩は、空間的映像処理があってこそ創られる表現であり、それらの比喩に潜むアイロニーとペーソスは、戦争に対するハーディの所感を端的に物語っている。

『覇王たち』は、副題 *An Epic-Drama* が示すように、英雄たちの壮大なドラマをテーマにした巨大な叙事詩劇である。しかしながら、ト書の描写に見られたように、この豪華な戦争絵巻物の核心には、深々とした悲哀と哀愁が立ちこめている。この点は、ト書に限らず、先に述べた天上界の精霊の起用によって、精霊の専用のコーラスが歌う数々の歌にも、「叙情の叫び」が聞かれる。このように、英雄叙事詩劇は、時として、ト書や精霊合唱の巧みな使用によって、長い叙情詩に変貌し、作品の持つ芸術性を倍増させている。

さて、こうした鳥瞰図の他に、ト書に見られる入念な細部描写も見逃せない。火薬やろうそくや薬品の臭いが混じった艦内収容室の場面、悪臭漂う沼地の三角洲の地獄図、極寒の中で凍傷に苦しみ、死んだ馬の肉を食べながら生命をつないでいるフランス敗残兵たち、敗戦ののち、深夜の森をさまよう馬上のナポレオンの孤独な姿—こうした印象深い場面において、ト書の果たす役割は実に大きい。そこでは、ト書は、単に殺伐とした戦場の写実を伝えるだけでなく、詩的想像力と深い含蓄を加味することによって、格調高い文学的創造を成就させているのである。

以上に略述してきた『覇王たち』の芸術的な特徴の他に、形而上学的な問題、史実的背景、愛国精神の発揚、郷土色なども作品を支える重要な要素であり、様々な視点からこの作品を読了することが可能である。『覇王たち』は、一つの読み物としても、研究対象としても、楽しみと興味は尽きない作品と言えよう。

（女子大学英文学科研究助手）

私の研究

同志社香里中学高校の歴史

喜多正明

私が同志社香里中学高校に就職しましたのは昭和三十三年でした。停年まで四十年、停年は遥か彼方と思っていましたのに、前半の二十年は瞬く間に過ぎ去って終いました。その頃、私は「何か一つ自分の力で為し得ることを母校に残したい」と考えるようになりました。ある時、先輩の先生方が「この学校設立の詳しい事情が判らない」と話しておられるのを聞き、学校の歴史を調査し明らかにしておくことが、日本史担当の教員である私に課せられた使命であるように思いました。

そこで、同志社合併以前の歴史について今までに書かれたものをいくつか読んでみましたが、いずれも資料に基づいて記述されたものではなく、第二山水中学校報国団が昭和十七年に発行した「山水」創刊号に収録されている常岡健二氏著「生まれて三年児」を書き改めたものであることが判りました。

折りから同志社創立百年の諸事業が進行していました。建築は各位のご尽力で香真館という立派なチャペルが竣工しましたが、同志社百年史の方は、知らなかったこととはいえ、香里部分の原稿はついに香里からは提出されず社史史料編集所の河野仁昭先生に大きい迷惑を掛けてしまいました。香里における校史研究の立ち遅れが痛感されました。

当時の校長教頭の賛同や教員会議の了承を得て、私は校史研究に着手しました。昭和五十四年春、本校の古い資料が保管されているという体育館の地下倉庫を開けてみました。幸いにも合併以前の資料は年度別に仕分けされてリンゴ箱に入れられていましたが、湿気で文字は滲み、それに埃が付着してドロドロの状態でした。だれがしたのか昭和十七年度分の箱には最近の領収証が投げ込まれ、なかの資料は床上に散乱していました。直ちに尚志館三階の小部屋にスチール製書庫を四つ設置し、資料を年度別に再整理し格納しました。一ヵ月ほどで乾燥しましたので、埃を払うと、使える状態になりました。

資料に目を通していくうちに、昭和六、七年頃同志社高商の配属将校であった大阪偕行社理事長遠藤春山少将が偕行社中学建設委員長になられ、偕行社理事常岡健二中佐が実務を担当されたことが判りました。私は学校設立の事情を、本校のＰＴＡ会誌「香里の丘」に二回に分けて記述しました。資料の点検が進むにつれて、この膨大な資料を如何にして整理保存するか、という問題につき当たりました。そこで昭和五十五年三月のある日、同志社社史史料編集所に河野先生を訪れ、百年史の件で謝意を表すると共に、資料の整理方法についてお尋ねしました。河野先生は「資料が傷まないためにもカラーファイルを使用するのがよいと思います」と教えていただきました。編集所の資料整理棚の香里部分をみますと、学則と入試問題集の他はめぼしいものがな

く、校史研究の立ち遅れを改めて痛感しました。

カラーファイルを使用するようになってから資料整理は急速に進みました。根が怠惰な私は何か強制力がないと仕事をしない習性がありますので、年三回発行される「香里の丘」に毎号一年分ずつ校史を記述することにしました。停年まで二十年、停年のときに現時点に追いつき、校史記述は終了することになります。また生の資料は、本校の教育研究委員会が毎年一回発行している「教育研究誌」に三年分ずつ掲載してもらうことにしました。

昭和五十六年には同志社合併三十年の記念事業の一つとして記念誌を作成することになり、私が編集を担当しました。記念誌に学校創立以来四十年間の校史としての役割をも担わせたいと考え、開校以来の教務日誌と会議録を大急ぎで目を通し、年表を作成しました。次に年表に基づいて、各年度一人又は二人に当時の思い出を記述してもらいました。原稿と一緒に年表を送りましたので、大変喜ばれました。さらに定年退職された先輩に集まってもらい座談会を開きました。事柄の内容について先輩各位はとてもよく憶えておられましたが、その年月日については記憶が曖昧になっておられました。そのとき年表が大変役に立ちました。こうして記念誌は小冊子ながらも、内容豊かなものになり、資料集としての役目も充分果たせるものになりました。

昭和六十年三月で校史記述は十七回を迎えいよいよ同志社香里中学高校の部に入ります。このとき私は次の三点に問題を感じています。

第一点は人間関係です。歴史は人間が造るものである以上、記述には多くの方々に登場願わねばなりませんが、個人の名誉を絶対傷つけることのないよう留意していく積りです。各位の経歴でも履歴書をみれば一目瞭然なのですが、必要事項を事務所に問い合わせて答えてもらえる範囲で記述しています。また現職の方は最小限に留めています。

第二点は財政問題です。数年前に、ある会議の席上、数年分の本校の財政表が配布されました。活字になっていることは公表されていることと思い、三十年記念誌に同志社になってからの財政表を掲載しようとしましたが、応諾していただけませんでした。また香里学園資料と共に体育館地下倉庫にあった会計帳簿類は私の手の届かないところに保管されてしまい、同志社香里中学高校の校史記述から財政問題は省略せざるを得ません。

第三点は合併から昭和五十年頃までの資料の絶対量が少ないことです。特に合併後数年間の資料が僅少です。新しい本館には資料室が設けられますので、香里に関するプリントなどお持ちの方はお届け下さい。

浅学ですので、資料の見落しや調査不足も多いと思います。各位には今後ともご教示ご指導をお願いします。特に同志社社史史料編集所を中心に各校の資料室が連繋を深め、資料の交換や研究の交流を行えば、より大きい成果を収め得るものと思われます。而して私の研究が次の世代の方の踏台になれば幸いだと思っています。

（同志社香里中高教諭）